

～旧約聖書を読んで感じること～ (71) ソロモンの知恵

最期にダビデがソロモンに残した言葉は、ダビデが神から受けた言葉であり、信仰の道を歩むことでした。ソロモンは若くして王位につきましたが、ダビデの遺志によるものであり、祭司や側近、家臣からの支持を受けて安泰でした。ソロモンは若者らしい希望と夢を抱いて、統治の方法を神に求めたのです。ギブオンにある祭壇に 1,000 頭もの燔祭を捧げました。ソロモンが真剣に祈る姿は、多くの民に共感を呼んだことでしょう。

「わが神、主よ、あなたは父ダビデに代わる王として、この僕をお立てになりました。しかし、わたしは取るに足りない若者で、どのようにふるまうべきかを知りません。どうか、あなたの民を正しく裁き、善と悪を判断することができるように、この僕に聞き分ける心をお与えください。」(列上 3:7)

ソロモンの「聞き分ける心」を求めた祈りを主は喜び、夢に現れ、非常に大きな祝福を与えました。

「あなたは自分のために長寿を求めず、富を求めず、また敵の命も求めることなく、訴えを正しく聞き分ける知恵を求めた。見よ、わたしはあなたの言葉に従って、今あなたに知恵に満ちた賢明な心を与える。あなたの先にも後にもあなたに並ぶ者はいない。わたしはまた、あなたの求めなかったもの、富と栄光も与える。生涯にわたってあなたと肩を並べうる王は一人もいない。もしあなたが父ダビデの歩んだように、わたしの掟と戒めを守って、わたしの道を歩むなら、あなたに長寿をも恵もう。」(列上 3:11)

「知恵」という言葉は、知識、英知、良識、識見、思慮、分別、という言葉と関係していて、聖書では繰り返し用いられている大切な美德の一つです。ソロモンが求めた知恵は「民を裁くために善悪を判断する力」であったと思います。裁くためには、「掟と戒め」が与えられています。人間というものは、嘘、偽証、隠匿などしても自らを守りたいものから、ソロモンは真実、事実を察知、洞察する力が必要だったのでしょう。ただ、ソロモンの裁判の例は一つしか記述されていません。



ソロモンの夢 Luca Giordano

司法だけでなく、ソロモンは行政面でも英知をもって統治しました。中央集権の形を強固にしました。基本となる農業、軍事、貿易、外交はもちろん、哲学、文学、自然学、建築、土木、鉱業などの文化、産業面でも博学ぶりを示し、さらに港を開港し海運を広めてイスラエルを強大な国家として世界に認めさせたのです。シェバの女王も訪ねて来ました。難問をもって試そうとしたのですが、ソロモンはすべてに解答を与え、驚嘆させています。後になって、ソロモンの書と言われる箴言の中で、自ら述懐しています。

「結局、知恵も知識も狂気であり愚かであるにすぎないということだ。これも風を追うようなことだと悟った。知恵が深まれば悩みも深まり、知識が増せば痛みも増す」(箴 1:17) ソロモンは自分の知恵によっては満たされませんでした。ソロモンの知恵はこの世の知恵だったのでしょう。

私たちは「主を畏れることは知恵の初め」(詩 111:10/箴 9:10)と、知恵を得る道は信仰から始まると示されています。真の知恵とは神を求めることを通して与えられるのではないのでしょうか。

イエス様は「知恵の正しさは、その働きによって証明される」(マタ 11:9)とされています。

使徒パウロは「神は知恵あるものに恥をかかせるため、世の無学な者を選び」(1 コリ 1:27)と記し、

「この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです。」(1 コリ 3:19)とあって、この世の知恵に頼むことを退けています。漢字が示すように、神の恵みを知る働きが知恵ある姿です。知恵とは人を生かす力であり、知識とは異なるものです。アビガイル、テコアの女、アベルの女が知恵ある女として賞賛されるのは彼女たちの仲裁者の姿、平和を求める姿から証明されています。